

ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向

——移住研究における理論的動向および
日本人移民研究の文脈を通して¹⁾——

長 友 淳*

Conceptualizing Lifestyle Migration : A Literature Review in Migration Studies

Jun NAGATOMO

要旨：経済、政治、宗教などが主な理由を占めていた従来の移民とは異なり、生き方やワークライフバランスあるいは住環境や教育などに関する希望や理想が移住を決定する推進力となる新しい移住形態が、先進国の中間層を中心に生まれている。この新しい移住形態は、欧米の社会学、人類学、人文地理学の移住研究においてライフスタイル移住という用語で概念化されつつあるが、未だに先行研究の蓄積や理論化が進んでいないのが現状である。これらの点を踏まえ、本論文は当該分野の先行研究の動向を考察するとともに、日本人移民の研究の文脈からの位置づけを行う。

Abstract :

Migration today can no longer be explained by traditional categories or factors. Although in the past traditional migrants were “forced” to emigrate by economic, political and religious factors, for contemporary middle class migrants, “lifestyle factors,” such as leisure, living environment, climate and educational opportunities, play a significant role in their decision making processes. This lifestyle-motivated migration is commonly called “lifestyle migration,” and has recently become a focus of research mainly in sociology, anthropology and geography. However, despite the increased transnational flows of domestic and international lifestyle migrants, the study of them have been under-examined in the existing research. In consideration of this academic circumstances, this article reviews the relevant bodies of literature and conceptualizes this new type of migration in the context of globalization and transnationalism.

キーワード：移民研究、ライフスタイル移住、中間層、自己実現、グローバル化、新移民

1. はじめに

グローバル化は人間の社会的および空間的越境を加速させ、人々は仕事や留学、観光、ワーキン

グホリデー、あるいは国際結婚や移住など、さまざまな理由で出身地以外の地域や国に移住するようになってきている。この先進国の中間層を中心とした移住の増加・多様化は、移住研究において新し

*関西学院大学国際学部准教授

1) 本論文は、筆者の著書『日本社会を逃れるーオーストラリアへのライフスタイル移住』(彩流社、2013)の一部を発展させたものである。

い視点を必要としている。従来の移住は、伝統的に経済的・宗教的・政治的理由など送り出し側社会からのプッシュ要因と、受け入れ側社会のプル要因（例：失業率の低さや賃金の高さ、政治的安定など）のマクロな相互作用から捉えられていた。しかし、現代の中間層における移住²⁾は、会社を退社しての移住や留学などに見られるように、必ずしも移住が生きていく上で必要な手段としての移住ではなく、より個人の生き方に対する願望や理想が移住の意思決定に影響を与えるようになっている。これらの中間層の新しい移住を捉える上で、これまで移住研究ではライフスタイル移住、I ターン、文化移民など様々な用語が作られてきたが、中間層における移住現象が加速している現実にも関わらず、理論化の進展と蓄積が進んでいないのが現状である。これらの点を踏まえ本論文は、中間層における新移民に関して、経済的動機以外の要素に着目する概念として欧米の社会学・人類学・人文地理学において普及しつつあるライフスタイル移住の概念を中心に、先行研究の整理および日本社会における移住研究の文脈からの位置づけを行う。

2. ライフスタイル移住

——定義および概念——

ライフスタイル移住 (lifestyle migration) は、近年、欧米の社会学、文化人類学、人文地理学における移住研究の中で普及しつつある用語であり、先進国を中心とした中間層の移住を考察する上で重要な概念である。ミカエラ・ベンソン (Benson 2009: 213) が「経済的理由や仕事や政治的理由など伝統的に主流であった移住理由以外の、より広範な意味での生活の質を求めている移住」と定義するとおり、ライフスタイル移住は、個人の生き方や生活の質に対する願望が移住の意思決定に大きく影響を与えている現代的な移住と捉えることができる。「経済移民」や「政治移民」に見られるように伝統的な移民は、社会・経済・政治におけるマクロなプッシュ・プル要因を軸に

捉えることができたが、現代の中間層とは、これらとは別の動きを見せている。つまり移住せざるを得ない状況からの脱出ではなく、個人の主体性や希望・願望が移住の推進力となっており、ライフスタイル移住は、その点に着目する新たな概念である。

グローバル化が進展する今日の「移住」は、かつての移住あるいは移民という言葉が意味した、故郷を捨て移住先で骨を埋めるという一方向的概念（日本社会においてはネガティブな意味合いを持ち続けてきた「移民」）ではない。また、今日のグローバル化論の理論的文脈、特に移住先と出身社会の双方に帰属する「多元的帰属」や国境を超える関係性の構築や維持を指すトランスナショナルリズム (e.g. Kearney 1995) から捉えるべき概念・用語となっている。同様に、移住や移民の概念の再検討に関連して、ワーキングホリデーや観光ビザでの長期滞在に見られるように、移住概念そのものも曖昧なものになり、近年の移住研究においては、「移住者 (migrants)」の概念は、migration すなわち「移動」という概念を基盤においた、「移動し、移動先に暮らす者」という幅広い概念で捉えられる傾向にある (加藤 2012; 山下 2009)。

以上のようなグローバル化時代の中間層の移住や移民に関して、これまで新しい移住形態を示す用語が数多く作られているが、ライフスタイル移住という概念は、これらの多くを包含する概念である (図 1 参照)。包含される新しい移住形態の例としては、海外と所属先社会を一定期間の滞在で往復する形や、それを目的としたロングステイビザを得ての移住、ワーキングホリデー (「ワーキング」が目的でない場合が多い)、移住でも旅行でもない形の「外こもり」 (下川 2007)、「自分探し」の移民 (加藤 2009)、「文化移民」 (藤田 2008)、「リタイアメント移住」 (King, Warnes, and Williams 1998) やロングステイ (小野 2007)、子供 (時には親自身も含む) の教育と海外経験のために一定期間 (大半は父親を残し母子で) 海外に

2) 「移住」 (migration) の概念に関しては、「永住」に限定した用法と、「移動し、移動先に暮らす」という広義の用法と二通りあるが、本論文は、後者の概念に基づき、移住をワーキングホリデーや「長期滞在」も含む概念として捉えている。

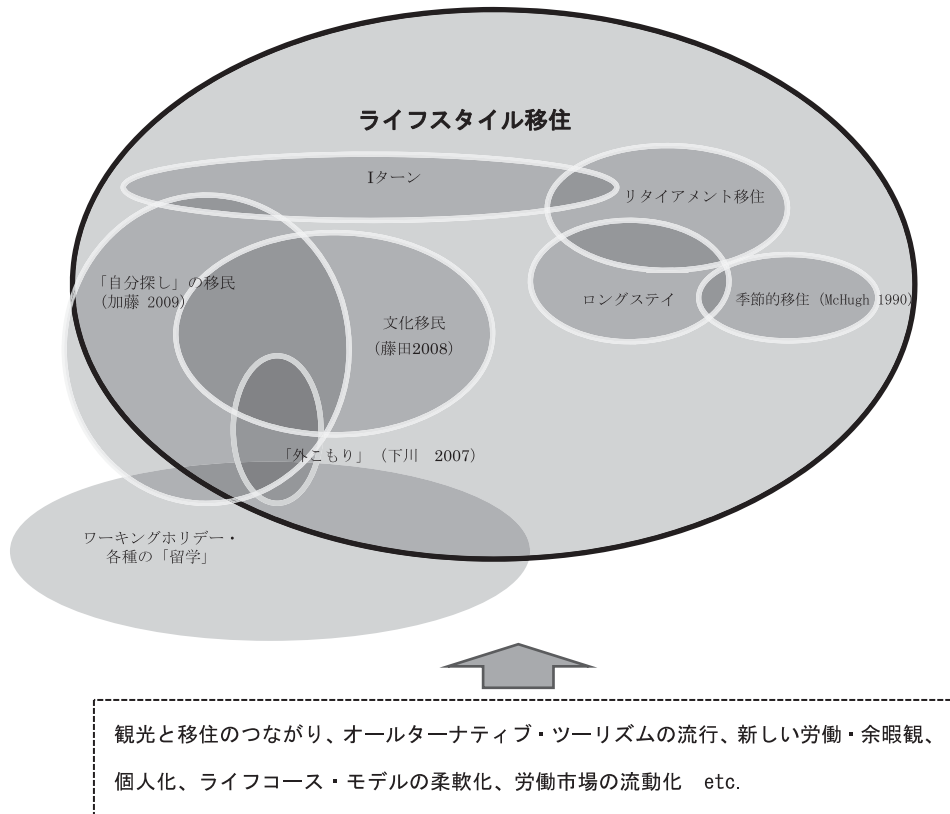


図1 ライフスタイル移住の概念と既存の移住カテゴリー（「移住」を広義で捉えた場合）

滞在する「親子留学」などを挙げることができる。これらの新移民をめぐる経済的要素以外の移住動機として、移住研究において着目されている視点としては、「海外生活への憧れ」（Kelsky 1999, 2001）、「理想のライフスタイルを享受する手段」（Nagatomo 2007, 2015；Williams and Hall 2000）、「自分探し」（加藤 2009）など、様々な視点から研究されている（次章参照）。

これらの現代の新移民をめぐる多様なカテゴリーの間でも共通点は存在する。第一に中間層における労働市場の流動性およびライフコース選択の柔軟性の増加が背景に存在する点を指摘することができる。伝統的に移民の大半を占めていた経済移民は、経済的苦境からの脱出あるいは経済的成功を夢見ての移住であり、その多くは低所得者層が占めていた。例えば日本社会からの移民を見ると、戦前・戦後の農村部から南北アメリカ大陸やハワイへの農業移民にその典型を見ることが

できる。しかし、上記に示したロングステイ、Iターン、文化移民などの新しい移民のカテゴリーを見てみると、彼らの大半が中間層に属し、移住しないと生きていけないという状況、つまり経済的状況が彼らの直接的なプッシュ要因とはなっていないことがわかる。また、グローバル化の進展に伴って、中間層の間での労働市場の流動性が増加するとともに、キャリアデザイン、結婚、リタイアメントをめぐるライフコース選択の柔軟性が増加した点も背景として存在している。日本社会の文脈では、90年代以降の社会構造の変化は、「立身出世から自己実現への価値観の転換」をもたらし、中間層におけるライフコース・モデルの多様化と流動性の増加を引き起こしている（多賀 2011；長友 2013 a）。また若年層の離職率上昇や退社後の留学やワーキングホリデーの増加あるいは早期退職による田舎暮らしの選択等に見られるように、日本社会の中間層は社会構造上の変化と

ライフスタイル価値観の変化の双方が、生き方の柔軟性と流動性の増加をもたらしている。このような日本社会の中間層をめぐる状況において移住や留学が増加する一方で、国内でも U ターン（出身地への帰還移住）や I ターン（出身地以外の地方部への移住）と呼ばれる地方部への移住が顕著に見られるようになっている（長友 2013 b）。上に述べた新移民の多くは、会社の途中退職を経ての海外渡航・移住を行っており、彼らの移住の背景として、中間層をめぐる状況の変化やライフコース価値観の変化は、共通する要素として捉えることができる。

第二に「観光や滞在経験と移住のつながり」が移住プロセスにおいて密接な関連性を持つ点を挙げることができる。観光やビジネス、留学などの滞在経験が移住や国際結婚につながるケースが増加し、現代の移住プロセスを考察する上で滞在経験と移住の意思決定の関連性は切り離して考えることはできない。また、観光そのものの変化、すなわちマス・ツーリズムよりもむしろ遺産観光や自然を楽しむオルターナティブ・ツーリズムの流行は、間接的にその地へのリタイアメント移住やロングステイなどの移住にもつながるようになっている。ウィリアムズとホール（Williams and Hall 2000：10）は移住研究と余暇研究を理論的結びつける中で、次のように述べている。

多くの先進国社会において、ポストモダニズムと関連性があると思われる価値観の変化が生じている。中でも特に自然、本物のライフスタイルあるいは想像上の懐かしいライフスタイルや風景へのノスタルジア、また環境保護主義が表面化してきている。これは、新しい観光の形態の成長をもたらすと共に、一部ではドルドーニュ地方やトスカナ州に見られるような地方部における独特な観光形態の誕生につながっている。一方で、この新しい観光形態の誕生は、これらの牧歌的な地方部への労働力人口の移住およびリタイアメント移住の両方を含むライフスタイル移住に影響

を与え、「田舎の高級化（*rural gentrification*）」につながっている³⁾。

ウィリアムズとホールは、先進国社会における消費主義的傾向のアンチテーゼとして新しい価値観が生まれ、それがライフスタイルへの関心や牧歌的生活へのノスタルジアに繋がり、結果的に新しい観光の形や従来移住先として脚光を浴びることのなかった地方部の移住先としてのブランド化につながっていると述べている。これらの点を日本社会の文脈から捉えると、90年代以降のオルターナティブ・ツーリズムの流行と中間層におけるライフコース・モデルの崩壊や労働市場の流動化は、遺産観光や地方部への観光・滞在の流行を生み、鹿児島県屋久島町や島根県隠岐郡海士町など、消費主義のアンチテーゼとしての移住やオルターナティブ・ツーリズムと移住の関連性が顕著に見られるようになっている（阿部 2013）。

第三に、移住の意思決定や推進力をめぐる「想像力」の力が挙げられ、いずれの新移民のカテゴリーにおいても、個人が移住先や移住以降の生活について想像し、その想像力が意思決定における推進力となっている点を指摘することができる。グローバル化以前の経済移民の時代においても先に移住した知人・親戚の話あるいは移民ブローカーからの情報をもとにしたサクセスストーリーをめぐる想像力や期待は、移住の意思決定の推進力となっていた。しかし、グローバル化が進展した現在、個人はインターネットや各種メディアによって具体的な情報やイメージを得ることができ、低価格化した航空運賃・旅行代金によって、移住を検討するための下見旅行を行うことができる。つまり、越境をめぐる想像力の具体性と推進力が、グローバル化以前よりも増加していると言える。アパデュライ（Appadurai 2001：6）はグローバル化時代の「想像力」の力について、次のように述べている。

想像力は個人の特質や日常性からの現実逃避あるいは美意識上の問題ではなく、日常生活

3) 筆者記。

や世間一般の人々の能力として見るべきである。すなわち想像力によって、人々は移住の意思決定を行い、国家的暴力に抵抗し、社会問題の是正を求め、市民団体の新しい形や国境をも超える連帯を策定するのである⁴⁾。

アパデュライは「下からのグローバル化」(grass-roots globalization) に関して上記のように述べ、人、資本、技術、情報、イデオロギーなど、様々な物的・文化的越境現象が加速する中で、想像力やファンタジーが、個人の移動や越境的な連帯を生み出す推進力となっている点を述べる。アパデュライのような想像力の作用に着目する視点は、新移民の移動をめぐるプロセスのみならず、移住後のアイデンティティや多元的帰属の研究 (e.g. Robins and Aksoy 2000) やロングディスタンス・ナショナリズム (e.g. Skrbis 1999) にも関連性を有していると言えよう。

本章は「ライフスタイル移住」に関して、中間層、個人化を含む新しい価値観・生き方、観光と移住のつながりなど、現代の中間層の価値観や観光の変化が関連性を持つ現代的現象として捉えることができ、経済的動機以外の要素に注目する点で、新移民をめぐる新しいカテゴリーの多くを包含する包括的概念である点を示した。また、これらの新移民をめぐる用語の中での共通点として中間層をめぐる労働市場やライフコース価値観の変化が関連している点、観光や滞在経験と移住の関連性、および移住の意思決定における想像力の役割の3点を示した。次章ではライフスタイル移住をめぐる先行研究の動向および日本人移住者に関する研究動向について論じる。

3. 先行研究の動向

ライフスタイル移住、すなわち経済的動機以外の要因が大きく作用している移住に関する先行研究は、欧米の社会学と人文地理学を中心に存在するものの、研究の蓄積は少ない。先行研究の傾向としては、移住理由や移住プロセスや移動パターンに関する研究が中心を占め、彼ら新しい移住者

のライフスタイルや理想の生活の質を求める傾向に関する調査が多い。先行研究の間では、ライフスタイル移住というカテゴリーで論じている研究とそうではない研究の双方が存在するものの、今日の中間層の国際移住において、経済的動機以外の要素、つまり広義のライフスタイル要因の重要性が認識されている点には一定のコンセンサスがある。また理論的な動向としては、観光あるいは滞在経験と移住の関連性に注目する動きが見られるが、その研究の蓄積は少ないのが現状である (Hall and Williams 2002 ; Williams and Hall 2000)。以下には、これらの先行研究の動向および日本人移住者をめぐる先行研究について論じる。

ライフスタイル移住に関する先行研究のうち国内移住に関する研究を見てみると、バーンリーとマーフィー (Burnley and Murphy 2003) が著書 *Sea Change : Movement from Metropolitan to Arcadian Australia* にて近年のオーストラリアにおける都市部から郊外部への人口移動を研究し、その人口移動の主たる要因が都市部の住環境や仕事中心の生活の現状と、郊外部 (沿岸部および内陸部) の牧歌的な環境への理想にある点を指摘している。このバーンリーらに見られるような郊外への移住を反都市化 (counter-urbanization) の文脈から研究する視点は、国内のライフスタイル移住に関する先行研究の中では移住要因の最も大きな要素として捉えられており、この視点は、ニュージーランドの地方部への移住の研究を行ったスワフィールドとフェアウェザー (Swaffield and Fairweather 1998) や、アメリカの北部の州とアリゾナ州フェニックスの間を季節ごとに移動／移住するリタイアメント移住者の「季節的移住」(seasonal migration) の研究を行ったマクヒューとミングス (McHugh and Mings 1996 : 546) の研究にも見ることができる。

また、この研究分野では、住環境から仕事・余暇の過ごし方、人生の生き方まで含む広義の「ライフスタイル」が「プル要因」として設定されている点に特徴がある。社会構造をプッシュ・プル

4) 筆者記。

の図式で分析する従来型の移住研究のフレームワークでは説明が難しいライフスタイルのプル要因としての誘引力は、質的研究がその手法として適合し、移住研究の中でも人文地理学、社会学、文化人類学の三つの領域が先行的に研究を行ってきた。例えばウォルムズレイらの研究 (Walmsley, Epps, and Duncan 1998) は、オーストラリアのニューサウスウェールズ州の沿岸部への国内移住の動向について、住環境、気候、ゆったりとした生活のリズムなどに見られるプル要因が、実際は経済的動機や経済的要素に見られるプッシュ要因よりも重要な要素として作用している点を指摘している。ファウンテンとホール (Fountain and Hall 2002) は、ニュージーランドの地方部へのライフスタイル移住についてリタイアメント移住、芸術家、都市部から逃れてきた専門職、テレワーク (在宅) 勤務者の4種類の類型を示し、スティムソンとミネリー (Stimson and Minnery 1998) は、オーストラリアのゴールドコーストへの国内移住を調査し、同地域への移住者を引き付けている最も大きな要因が経済的動機ではなくライフスタイルである点を述べている。同様の視点は、アメリカのノースキャロライナ西部のリタイアメント移住者の調査で移住先の景観、気候、余暇活動などが彼らを引き付ける要因となっている点を指摘するハスとセロー (Hass and Serow 1993) の研究や、パリの人口動態の調査を通してパリの人口の約四分の一が退職後にパリから離れている点を指摘した上で、この人口移動には故郷への帰還、家族構成員の近くへの移動、理想のライフスタイルを享受するための三種類の移動が含まれる点を指摘するクリビアとカイチ (Cribier and Kych 1993) の研究などにも見られる。

一方、ライフスタイル移住に関する国際移住の先行研究では、主に欧米社会における国境を超えるリタイアメント移住者や中間層専門職の研究が行われている。例えばサルヴァ・トーマス (Salva-Thomas 2002) は、スペインのバレアレス諸島へのイギリス人およびドイツ人移住者の移住理由に関する研究を行い、彼らの移住の動機に関して、リラックスした生活への探求が最も大きな要素である点を指摘している。また、レイとコバ

ヤシ (Ley and Kobayashi 2005) が行った香港からオーストラリアへの移住者の研究では、90年代の中国への香港返還前に移住した住民は、政治的動機を有していた一方で、生活の質に関する理想も意思決定の要素として大きな部分を占めていた点を指摘している。同様に、IPPら (Ip, Wu, and Inglis 1998: 84) は、台湾からオーストラリアへの中間層移住者の移住プロセスの研究の中で、彼らの大多数が経済的成功を求めて移住している一方で、同時に教育、住環境、オーストラリアへの親近感などのライフスタイル要因が移住の動機として一定の役割を担っている点を述べている。これらの経済的動機以外の要因が移住の意思決定に影響している点を強調する視点は、イギリスからアイルランドへの帰還移民およびフランスからポストガル、北アメリカからイタリア、ギリシャからマルタへの帰還移民を研究したセレス (Cerase 1974) の研究、イングランドのベックスヒルおよびクラクトン＝オン＝シーへのリタイアメント・リゾートの研究を通して海沿いおよび地方部の地理的特性がリタイアメント移住を誘引する点を示したカーン (Karn 1977) の研究などにも見られる。

また、国内移住、国際移住を問わず、先行研究の動向として、観光と移住のつながりへの注目を指摘することができる。例えばクーバ (Cuba 1991) はケープ・コッドへの移住者への研究の中で、度重なる現地への観光滞在の経験が結果的にリタイアメント移住の意思決定に繋がっている点を示している。この「観光から移住へのプロセス」(Nagatomo 2008, 2015) への着目は、文化人類学や質的社会学および人文地理学など、質的研究を採用する先行研究の中でも顕著に見られる。例えばワイズマンとローズマン (Wiseman and Roseman 1979) は、リタイアメント移住を単なる出来事として捉えるのではなく、退職などの「誘発メカニズム (triggering mechanism)」によって開始される一種のプロセスで見ることを提唱する。すなわちワイズマンらは、リタイアメント移住者の意思決定が移住前に居住していた地域における経験や国際観光の経験などの相互作用の結果として生じるものである点を強調し、特に観光の

経験から得る特定の地域への愛着が結果的に移住の意思決定に影響を与える点を指摘している。これらの移住前の滞在経験と移住の意思決定をプロセスとして捉える視点は、現代の移住研究において着目されている点であり、トゥルーリー (Truly 2002) による北米からメキシコのチャパラ近郊へのリタイアメント移住について観光経験とリタイアメント移住の関連性を論じる研究や、ロドリゲス (Rodriguez 2001) によるスペインのコスタ・デル・ソルへのリタイアメント移住者の意思決定と過去の現地への滞在経験の繋がりに関する指摘、またキングら (King, Warnes, and Williams 1998) によるアルガルブおよびコスタ・デル・ソルへのイギリスからのリタイアメント移住者の 90 パーセント以上が現地を過去に観光客として訪れていた点を示す研究などに見ることができる。

観光に関連する移住としては、観光客が移住者に移行するプロセスの他に、観光産業が労働力を誘引するプロセスも見られる。このプロセスに関する研究としてはキングによる南ヨーロッパの観光地への移住研究を代表例として挙げることができる。キング (King 1995) は、観光産業が労働需要を生み出し、それが結果的に観光地への労働人口の移動を生み出す点を指摘している。この観光産業の移民誘引作用に関するキングの視点は、アメリカのワイオミング、モンタナ、アイダホにおける起業移民の研究の中で観光が労働人口の移動、ライフスタイル移民、リタイアメント移住などを誘発する点を指摘するスネペンジャーら (Snepenger, Johnson, and Rasker 1995) の研究や、リタイアメント移住者以外の移住者呼び込むためにスウェーデンの地方政府が行った観光の戦略的利用に関するニエドミセル (Niedomysl 2005) の研究、オーストラリアの観光開発が結果的に日本人観光客および日本人移住者の流入に繋がった点を論じるナガトモ (Nagatomo 2008) の研究にも見られる。

以上、ライフスタイル移住に関する研究動向を述べたが、日本人移住者に関する研究を見ると、ライフスタイル移住という用語や視点の定着は見られず、研究の蓄積も少ないのが現状であ

る。しかし、経済的理由以外の理由による新しい移住について一定の研究上の注目は見られる。例えば、加藤 (2009) は『自分探しの移民たち—カナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』において、バンクーバーに移住・滞在する日本人若年層を研究し、流動性に満ちた若者の生き方について指摘する中で、「自分探し」、「日本社会からの逃避」、「国際的に活躍」、「英語を使って仕事」、「夢」など、経済的必然性を伴わない曖昧な要素が彼らを「海外」に向かわせる推進力となっている点を論じている。また、加藤は海外に滞在する日本人の若者が海外での自分探しに向かう背景として、日本の若者が「大人」となるためには「就職」しか達成手段がなく、「結婚」が大人の指標として絶対的価値を持たなくなった現代の状況において、仕事を自分自身と同一視する日本人の傾向が自分探しの海外渡航の重要な要素として考えられる点を指摘している。この加藤の研究は、現代の日本の若者が経済的手段としての移住ではなく、自分らしい生き方や仕事の模索という主観的要素、あるいはアパデュライ (Appadurai 2001 : 6) が述べるところの想像力やファンタジーが、移住の推進力となっている具体的事例と言える。同様に、経済的要素以外の要素が移住の推進力となっている点に着目する研究として、小野 (2007) は、長期滞在型の海外観光である「ロングステイツーリズム」のマレーシアにおける事例を研究し、現代の旅行に求められているものが観光から滞在や暮らしへと変化しつつある点や、ロングステイツーリズムの普及が複数の場所での暮らしやトランスナショナルに暮らす生活様式の表れであり、移住先が終の棲家ではなく老いの棲家である点を指摘している。ハセガワ (Hasegawa 2007) は、中国の上海に向かう日本人女性の専門職の移住を論じる中で、彼女たちの移住要因において経済的動機以外の要因が経済的動機に勝っている点を論じ、それらの例としてグローバルな都市における選択肢の多様さやライフスタイルなどを指摘している。また、サトウ (Sato 2001) は著書 *Farewell to Nippon* にてオーストラリアへ移住する現代の日本人の移住後の生活について質的研究を行い、経済的要因以外の理由で移住した日

本人移住者の理想と現実のギャップを中心に描いている。また、ミズカミ (Mizukami 2007) は、著書 *Sojourner Community* において、ライフスタイル移住という概念を導入していないものの、オーストラリアの日本人コミュニティを「滞在者コミュニティ」として捉え、その移住・滞在形態の多様性を指摘している。これらの研究の中には「ライフスタイル移住」という用語が使用されていないものも含むものの、現代の日本人の中間層の移住において、経済的要因以外の要素が重要な役割を果たしているとの認識では一定のコンセンサスがある。

以上に挙げた現代の日本人中間層のライフスタイル移住研究あるいは経済的要因以外の要素を移住要因として設定している研究の動向を踏まえると、以下の点を指摘することができる。第一に、日本人ライフスタイル移住者の先行研究では、1990年代以降の日本社会の「ライフスタイルの変化と移住の関連性」に関する研究は行われてこなかった。第二に、先行研究の中では日本人のライフスタイル移住をライフスタイル価値観の変化という文脈や関係性から論じる研究はあまり行われてこなかった。第三に、先行研究においてはロングステイツーリズムの議論に見られるように、観光と移住の新たな繋がりへの注目は見られるものの、観光の経験が実際にどのように移住の意思決定に繋がっているかというミクロな視点での研究の蓄積は少ない。以上のように、社会的事象としては、中間層の国際移動がグローバル化時代に飛躍的に増加し、新しい理論的視点からの移住研究が必要とされているものの、それに対する先行研究の蓄積は十分とは言えないのが現状である。

4. おわりに

本論文は、今日の先進国の中間層を中心として顕著になっているライフスタイル移住に関して、その概念の整理と先行研究の概略を述べた。また、その概念を日本人移住者の文脈から考察し、研究動向を整理する作業を行った。ライフスタイル移住をめぐるのは、新移民に関して作られている多くの用語を包含する概念であり、現代の中間層の移住を研究する上で、重要なフレームワーク

と言える。日本人移住者に関しては、今日の海外への移住や長期滞在の流れの多くは、この範疇に含まれる。その意味で、今後日本人移住者の研究において、その理論的重要性は増すことが予想される。

引用文献

- Bailey, F. G. 1970. *Stratagems and Spoils*. Oxford : Blackwells.
- Benson, M. 2009. A Desire for Difference : British Lifestyle Migration to Southwest France. In *Lifestyle Migration : Expectations, Aspirations and Experiences*, eds. Michaela Benson and Karen O'Reilly, 121-135. Farnham : Ashgate.
- Burnley, I., and P. Murphy. 2003. *Sea Change : Movement from Metropolitan to Arcadian Australia*. Sydney : University of New South Wales Press.
- Cerase, F. P. 1974. Expectations and Reality : A Case Study of Return Migration from the United States to Southern Italy. *International Migration Review* 8(2) : 245-262.
- Cribier, F., and A. Kych. 1993. A Comparison of Retirement Migration from Paris and London. *Environment and Planning A* 25 : 399-420.
- Fountain, J., and C. M. Hall. 2002. The Impact of Lifestyle Migration on Rural Communities. In *Tourism and Migration : New Relationships between Production and Consumption*, eds. C. Michael Hall and Allan M. Williams, 153-168. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Hall, C. M., and A. M. Williams, eds. 2002. *Tourism and Migration : New Relationships between Production and Consumption*. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Hasegawa, E. 2007. Reconfiguring Boundaries : Expatriate Japanese Women in Shanghai. *Intersections : Gender, History and Culture in the Asian Context* 15 (May 2007) [http : //intersections. anu. edu. au/issue15/hasegawa.htm](http://intersections.anu.edu.au/issue15/hasegawa.htm) (accessed November 7, 2008).
- Hass, W., and W. Serow. 1993. Amenity Retirement Migration Process : A Model and Preliminary Evidence. *The Gerontologist* 33(2) : 212-220.
- Ip, D., C. T. Wu, and C. Inglis. 1998. Settlement Experiences of Taiwanese Immigrants in Australia. *Asian Studies Review* 22(1) : 79-97.
- Kearney, M. 1995. The Local and the Global. *Annual Review of Anthropology* 24 : 547-565.
- King, R., A. Warnes, and A. M. Williams. 1998. Interna-

- tional Retirement Migration in Europe. *International Journal of Population Geography* 4(2) : 91–111.
- Kelsky, K. 1999. Gender, Modernity, and Eroticized Internationalism in Japan. *Cultural Anthropology* 14(2) : 229–255.
- . 2001. *Women on the Verge : Japanese Women, Western Dreams*. Durham : Duke University Press.
- Ley, D., and A. Kobayashi. 2005. Back to Hong Kong : Return Migration or Transnational Sojourn? *Global Networks* 5(2) : 111–127.
- Nagatomo, J. 2007. Japanese Lifestyle Migration to Australia : New Migrants in the Era of Transnationalism. *Bulletin of Kyusyu Anthropological Association* 34 : 1–22.
- . 2008. Globalization, Tourism Development, and Japanese Lifestyle Migration to Australia. In *Development in Asia : Interdisciplinary, Post-Neoliberal, and Transnational Perspectives*, ed. Derrick M. Nault, 215–236. Boca Raton : Brown Walker Press.
- . 2015. *Migration as Transnational Leisure : The Japanese Lifestyle Migrants in Australia*. Leiden ; Boston : Brill.
- Niedomysl, T. 2005. Tourism and Interregional Migration in Sweden : An Explorative Approach. *Population, Space and Place* 11 : 187–204.
- McHugh, K. E., and R. C. Mings. 1996. The Circle of Migration : Attachment to Place in Aging. *Annals of the Association of American Geographers* 86(3) : 530–550.
- Mizukami, T. 2006. Leisurely Life in a ‘Wide Brown Land’ : Japanese views upon Australia. *Journal of Applied Sociology* 48 : 19–35.
- Robins, K., and A. Aksoy. 2000. Thinking across Spaces : Transnational Turkish Television from Turkey. *European Journal of Cultural Studies* 3(3) : 343–365.
- Rodriguez, V. 2001. Tourism as a Recruiting Post for Retirement Migration. *Tourism Geographies* 3(1) : 52–63.
- Salva-Thomas, P. A. 2002. Foreign Immigration and Tourism Development in Spain’s Balearic Islands. In *Tourism and Migration : New Relationships between Production and Consumption*, eds. C. Michael Hall and Allan M. Williams, 119–134. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Karn, V. A. 1977. *Retiring to the Seaside*. London : Routledge and Kegan Paul.
- Skrbis, Z. 1999. *Long-Distance Nationalism : Diasporas, Homelands and Identities*. Aldershot : Ashgate.
- Snepenger, D., J. D. Johnson, and R. Rasker 1995. Travel Stimulated Entrepreneurial Migration. *Journal of Travel Research* 34(1) : 40–44.
- Stimson, R., and J. Minnery. 1998. Why People Move to the ‘Sun-belt’ : A Case Study of Long-Distance Migration to the Gold Coast, Australia. *Urban Studies* 35(2) : 193–214.
- Sato, M. 2001. *Farewell to Nippon : Lifestyle Migrants in Australia*. Melbourne : Trans Pacific Press.
- Swaffield, S., and J. Fairweather. 1998. In Search of Arcadia : The Persistence of the Rural Idyll in New Zealand Rural Subdivisions. *Journal of Environmental Planning and Management* 41(1) : 111–127.
- Truly, D. 2002. International Retirement Migration and Tourism along the Lake Chapala Riviera : Developing a Matrix of Retirement Migration Behavior. *Tourism Geographies* 4(3) : 261–281.
- Walmsley, D. J., W. R. Epps, and C. J. Duncan. 1998. Migration to the New South Wales North Coast 1986–1991 : Lifestyle Motivated Counterurbanisation. *Geoforum* 29(1) : 105–118.
- Williams, A. M., and C. M. Hall. 2000. Tourism and Migration : New Relationships between Production and Consumption. *Tourism Geographies* 2(1) : 5–27.
- Wiseman, R. F., and C. R. Roseman. 1979. A Typology of Elderly Migration based on the Decision-Making Process. *Economic Geography* 55 : 324–537.
- 阿部裕士 2013 「地域の誇りを高め、風景を守るオルタナティブツーリズムのあり方」(International Conference on Sustainable Conservation and Use of Cultural and Natural Heritage in Japan and China : Comparative Studies and Cross-Sectoral Dialogue 学会発表 於 Hong Kong Shue Yan University, 11月26日, 2013年).
- 小野真由美 2007 「ロングステイツーリズムー第2の人生は海外で」山下晋司編『観光文化学』新曜社, 145–150頁.
- 加藤恵津子 2009 『「自分探し」の移民たちーカナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』彩流社.
- 2012 「“Do” から “Be” への海外移動ーカナダとオーストラリアの日本人の若者の「仕事」と「自分」をめぐる語り」(日本文化人類学会発表 於 広島大学 6月23日, 2012年).
- 下川祐治 2007 『日本を降りる若者たち』講談社.
- 多賀智太 2011 『揺らぐサラリーマン生活ー仕事と家庭のはざまで』ミネルヴァ書房.
- 長友 淳 2013 a 『日本社会を「逃れる」ーオーストラリアへのライフスタイル移住ー』彩流社.
- 2013 b 「「自己実現」神話の誕生と「新しい移住」のつながりー島根県隠岐郡海士町へのIター

- ン移住者の事例を通して」(国際文化学会発表 於
西南学院大学 3月23日, 2013年).
- 藤田結子 2008 『文化移民-越境する日本の若者とメ
ディア』新曜社.
- 山下晋司 2009 『観光人類学の挑戦-「新しい地球」
の生き方』講談社.